

## 「羽村～多摩湖・歴史ウォーク(後半)」

2024-4-07 記 伊藤 裕章

- 実施日 2024-4-04 (木) ■参加者 25 名 (他部参加者 1 名含む)
- コース 春名塚バス停 (武蔵村山市) ～横田トンネル～武蔵村山市立歴史民俗資料館
- 現地協力 現地ボランティアガイド 石川伊三郎氏、武蔵村山市観光案内所長 (随行)、武蔵村山市立歴史民俗資料館 学芸員

狭山湖 (山口貯水池) と多摩湖 (村山貯水池) は、狭山丘陵の谷を堰き止めてつくられた人工湖です。では、その水はどこから、どんな経路を通って来るのでしょうか。昨年秋の「羽村～多摩湖・歴史ウォーク」(前半) では、取水口のある羽村市 (東京) を出発、導水管の埋設ルートを進んで、横田基地の手前まで歩きました。4 月 4 日の「歴史ウォーク」はその後半で、横田基地の東隣、武蔵村山市からふたつの湖 (貯水池) へ向け出発しました。

心配された雨は未明に上がり、4 日は花曇り。参加者 25 人のうち 22 人は、8 時 45 分に



JR 武蔵野線新秋津駅前に集合。西国分寺駅で乗り換えて昭島駅へ。残る 2 人は東所沢駅で先に乗車し、1 人は昭島駅で合流しました。同駅から立川バスに乗り、春名塚停留所で下車。武蔵村山市の最高齢ボランティアガイド、石川伊三郎さん (94 歳) らと合流しました。

村山貯水池は 1916 (大正 5) 年に着工し、1927 (昭和 2) 年に竣工。続いて着工した山口貯水池は 1934 (昭和 9) 年に竣工しました。

貯水池を建設するには、谷を堰き止めると同時に、水を確保する必要があります。多摩川上流の羽村堰 (羽村市) に取水口を設置。そこから地中に導水管を敷設し、ふたつの貯水池に繋げました。また、谷を堰き止める堰堤を造るため、コンクリート壁建設に必要な大量の砂利を羽村で採取し、鉄道で運ぶことにしました。

既存の鉄道では時間も費用もかかるため、羽村から貯水池に直結する導水管の地上部分に、貨物専用の鉄道を工事の期間だけ敷設しました。「軽便鉄道」と呼ばれ、線路幅は 609 mm (JR 在来線の線路幅は 1067 mm)。機関車に「ナベトロ」と呼ばれる鍋型のトロッコを連結して、砂利や石を運びました。

村山貯水池建設では、1921 (大正 10) 年に軽便鉄道「羽村村山線 (仮称)」が敷設され、山口貯水池では 1928 (昭和 3) 年に「羽村山口線 (仮称)」が敷設されました。全長は 12.6 キロ。羽村～武蔵村山間は「村山線」の廃止跡に同じルートで「山口線」を敷設しました。

石川さんと歩き始めた野山北公園自転車道（約4キロ）は、導水管ルート跡であり、二つの軽便鉄道跡でもあります。自転車道はそこから東にまっすぐ伸び、沿道には桜並木や植え込みが整備され、その両側は住宅がほぼ一直線に並んでいます。



石川さんは歩きながら「皆さんは所沢ですね。私は昭和5年、（山口貯水池の底に沈んだ）勝楽寺村で生まれました。子どものころに、立ち退きで母方の里の武蔵村山市に移り住みました」と懐かしげに語りました。なんと、旧勝楽寺村（現所沢市域）の生き証人だったのです。

しばらく歩くと、「残堀碎石場跡地」の標識が立ち、コンクリート製の台座らしきものがある広場へ。かつてここには高さ10メートル近い栈橋が設けられ、羽村から来たトロッコ列車は、この上から積み荷の砂利を落とし、大ききでより分けて、現場に運んだそうです。

石川さんは「軽便鉄道敷設は突貫工事で、多くの作業員はかわいそうなくらい重労働だった」と話されました。貯水池建設とは時期が合わない



ので調べて見ると、太平洋戦争最中の1943（昭和18）年に、米軍の空襲から貯水池を守るため、急ぎ堰堤のかさ上げ工事が行われ、軽便鉄道も稼働したという記録がありました。当時13歳前後だった石川少年はそれを目撃していたのです。狭山湖の第一取水塔には、機銃掃射の弾跡が残っています。

楽しみだったのは、約700本の桜並木と武蔵村山名物の「かてうどん」。桜は写真のように5〜7分咲きの所もありましたが、ほとんどが3分咲きで、少し期待外れでした。「かてうどん」は、小さなかき揚げと青菜がついた肉汁うどん、ボリュームもあり、期待通りでした。

食後は横田トンネルへ。丘陵地に鉄道を通すため掘られた6つのトンネルの、最初の一つです。ここだけ通って折り返しましたが、高さ、幅とも約270センチと狭く、トロッコ列車が、かなり小ぶりだったことがうかがえました。

最後に訪れた市立歴史民俗資料館では、軽便鉄道の線路が展示され、導水管や軽便鉄道について、学芸員さんがわかりやすく解説されました。都内でただひとつ鉄道の通っていない市とあって、鉄道への渴望感が強く、軽便鉄道への愛着が印象的でした。

その後、市役所前からバスで帰宅の途に。下見では、JR八高線箱根ヶ崎駅から、野山北自転車道を経て、狭山湖の堰堤経由で西武球場前駅まで歩きましたが、歩行距離は20キロに及び、帰路は足場の悪い急な上り坂が続く事が判明。全員そろって多摩湖まで踏破するのは難しいと判断し、一部をバスに変更しました。その結果、タイトルに謳った「多摩湖」は

見ることができませんでした。期待して参加された方にお詫び申し上げます。 以上

【参考資料】「武蔵村山と鉄道―昭和から令和まで」令和3年度特別展解説書、及び  
「武蔵村山市立歴史民俗資料館報『資料館だより第64号』」令和5年3月31日発行。



武蔵村山市立歴史民俗資料館前

活動担当 E グループ

担 当 者：國谷征治 田沼幹子 恩田正子 伊藤裕章

写真協力：小倉洋一